

# 日本における功利主義思想の流入と教育<sup>†</sup>

—明治期の「立身出世」を手がかりとして—

市川 圭\*・渡邊 弘\*\*  
宇都宮市立豊郷中学校\*  
宇都宮大学教育学部\*\*

本稿の目的は、日本の近代以降において功利主義思想がどのように流入され、その思想が当時の教育にどのように影響を与えたのかについて歴史的に考察することにある。特に、功利主義思想の流入については、いち早く導入した陸奥宗光と西周の二人の人物に焦点を当てて考察し、また、功利主義思想が教育に及ぼした弊害に関しては、明治期における「立身出世」の風潮とそれに対する批判について検討する。

キーワード：功利主義思想、立身出世、快苦、善さ、幸福

## 1. 日本への功利主義思想の流入—陸奥宗光と西周

我が国は、開国に伴い、早急な近代国家成立のため、まずはその根本思想の変化が必要だとし、これまでの東洋的な考え方を脱却し、西洋の合理的で資本主義的な発想が日本に取り入れるべきだと考えるようになった。また、そうした欧米の知識を取り入れることにより、国民一人ひとりの人材育成を行なって、富国強兵を実現しようとした。ここにおいて、日本の思想の転換期が訪れたのである。そうした状況の中、政治的手法・法整備の観点から、イギリスのJ. ベンサム (Jeremy Bentham, 1748-1832) の功利主義に啓発されて、政府内から改革し、国家の安定を図ろうとしたのが陸奥宗光であり、一方同じイギリスのJ. S. ミル (John Stuart Mill, 1806-73) の影響を受けて功利主義思想の定着という観点から、国民の啓蒙を奨めたのが西周である。

### (1) 陸奥宗光の功利主義思想

陸奥宗光 (1844-1897) は、身分の高い武士の子として紀州藩 (現在の和歌山県と三重県南部) に生まれ、15歳で江戸に出て儒学を学んだ。18歳のときに尊王攘夷運動に参加し、有名志士との面会を求めて、長州の桂小五郎、土佐の板垣退助を訪れ交流を持った。その後、父と親交のあった坂本龍馬に見

込まれ、勝海舟の海軍操練所に入り、そこでオランダ語や海外の事情を学び、さらに薩英戦争を目の当たりにして、攘夷の不可能なことを知ることとなった。そして、24歳のときに坂本龍馬の海援隊に入り、討幕運動の活動家となる。やがて陸奥は、岩倉によって明治時代成立とともに、新政府入りを果たした。そこでは、廃藩置や徴兵制度、税制改革といった近代化政策を主張し、特に、税制改革ではそれまでの封建制度の基礎であった土地売買の制限を撤廃し、自由経済を日本にも取り入れようとした。こうして日本の近代化に尽力していた陸奥は、更なる目標として法律の近代化を見据えていた。

だが、1877年に西南戦争が始まると、それを機に藩閥政府を転覆しようと画策していた土佐立志社に加担したとされ、陸奥は逮捕され、1878年から5年間獄中で過ごすことになり、その間世の中と離れて勉学に集中していた。このとき、ベンサムの著した『An Introduction to the Principles of Morals and Legislation』を読破し、それを『利学正宗』として訳した。このベンサムの功利主義思想によって、陸奥は自らの思想に根拠を見出すとともに、これまで重視されてきた朱子学が近代化にとっては足枷にしかならないことを理解した。そして、新たな根拠として「天」によらない「善さ」を求めていた陸奥にとって、ベンサムの唱えた「快苦」を基準とした、快楽の増大と苦痛の減少による幸福追求という功利主義思想は極めて魅力的に映ったことは間違い無い。功利主義は、人間の感覚を一切の価値判断の基準に据えるものであり、そうすることによって、伝

<sup>†</sup> Kei ICHIKAWA\* Hiroshi WATANABE\*\*:

Education and Inflow of Utilitarianism in Japan

\* Toyosato Junior High School

\*\* Faculty of Education, Utsunomiya University

統や権力といった、外から押し付けられた既成の道徳を捉えなおすことが目的とされた思想である。そのため、これまでの価値観を打ち砕き、新たな道徳原理や自由主義の根本として、ベンサム功利主義思想が陸奥にもたらした影響は絶大であった。ベンサムの著書『An Introduction to the Principles of Morals and Legislation』の全文を翻訳したときに、同じく獄中で『面壁独語』『福堂独語』『資治性理談』という文章も書き記しており、その内容を見ると、陸奥はベンサムに対し先生をつけて呼ぶほどまでに傾倒していたことがうかがえる。例えば、『面壁独語』の冒頭で次のように記している。

「英國の哲學ベンサム先生の立法論綱に、人類苦樂の感情を分析細別して、一篇の表記を作れり、其表中に記憶表記第十一の快樂、又想像同第十二の快樂といふ者あり、(中略)唯々幸に胸中常に此二快樂ありて、間々以て幽憂を消すことを得たり、先生眞に余を欺かざるなり、(以下略)」<sup>1)</sup>

このように、自分が逮捕されて以来、人生において挫折を感じ悲観に暮れていたところに、ベンサムの思想が自己の心の支えとなっていたと述べ、また彼の思想が自分を裏切らなかつたと感嘆している。さらに陸奥は、その著『資治性理談』の中で、「人性の原始即ち基礎は、善根又は悪根を固有する者に非らず、唯々一個の情欲ありて存するのみ、而して此情欲を達するが爲めに、其體力と智慮とを具備す、(以下略)」<sup>2)</sup> というように、人は本来善悪を生じさせるものになるものを持っているわけではなく、快苦に対する欲求こそが、そういった人間固有の能力を發揮するための動機になっていると主張している。そして、ベンサムの快苦原理に基づいて説明をしつつも、ベンサムがその快苦をそれぞれ 26 種類に分類したのに対し、陸奥は快苦を突き詰めた先にはただ一つ「欲」があるのみであるとした。それは、「快樂を求める欲」と「苦を避けようとする欲」こそが行動原理の根源であるという考え方であった。

こうした考え方の根本には、国民一人ひとりの近代化への意識改革、特に一人ひとりが個々の人格の高尚化を目指すよりも、現実の利益追求という実利的な価値観への変更こそが社会全体を幸福にしたいと陸奥が考えていたためであった。そのための「欲」の肯定であり、それを保護するための政治的手法の実現が重要であるとした。ここには、陸奥が近代化

に欠かせない思想として自由主義をベンサムの著書から読み取り、自由経済の在り方や議会制民主主義の必要性などについても理解を深めていたことが大きいであろう。自由主義を実践するために陸奥は、江戸時代から推奨されてきた儉約政策を廃止するとともに、藩の政策によってその職種を決定してしまうといったような従来の体制を崩し、それぞれの人々が一番儲かる仕事をし、各自の欲望を満足させるよう政府が保護していくべきだと考えた。これは、経済の活性化による国力増強という狙いととも、ベンサムの快樂計算の原理に立った幸福観によって、国民の自由主義思想を啓発させるための政策であったことは明らかである。そして陸奥は後に、農商務大臣となったときにこの産業の自由化と保護を唱え、自由主義による国力増強の実現に尽力した。

また、自由主義のもう一つの重要な機能である議会制民主主義についても、陸奥は公議世論を重んじてこそ、人民の利益が確保されるはずだとし、現在の新政府が専制を行ないつづけていては、人民の不満は溜まる一方で、国が治まることはないと考えていた。そして、国を治めるためには、民意を反映した政治を行なうための責任内閣制こそが実施されるべきだとした。この国民に根差した政府という発想にも、功利主義思想が掲げる「最大多数の幸福原理」にその根拠を見出していたところが大きいだろう。

陸奥が功利主義思想の導入を行なったことには、それまでの朱子学の「天」に基づく合理主義から、人間の感覚を基準とした合理的判断への移行と、近代化の実現の基礎となる自由主義社会へ向けた憲法と議会の成立、またそのための国民意識の向上、そしてなによりも社会全体の利益を増進させるという一致した目標に向かって人々を促していこうという意図があったためである。ただ、陸奥の功利主義的発想は近代化を急ぐあまり、活動や制度の効率を至上価値とする「効率主義」や人々の効用を至上価値とする「効用主義」という偏った価値観をも根拠づけてしまったと考えられる。これらの価値観は、現代においても経済活動や政府の方針といったものの根拠として存在し、倫理的な問題と対立することとなっている。

## (2) 西周の功利主義思想

陸奥とは異なる観点から功利主義を捉え、ベンサムよりもむしろ J.S ミルの思想から独自の理論を組

み立てたのが西周（1829—1897）である。西の功利主義に対する関心は、陸奥の捉えた功利主義があくまで政治的手法として採用されたのに対して、人々の道德規範として功利主義を位置づけるために功利主義を捉えていた。

西周は、津和野藩（現在の島根県）に生まれ、父は藩に仕えた医師であり、また儒学者であった。12歳から藩校養老館で朱子学を学び、20歳のときに西の秀才ぶりが藩主の目に留まり、家業である医者を受けずに儒学者として専念するよう命じられ津和野の藩校で教師として働くこととなる。やがて、25歳の1853年に、ペリーの来航という一大事件が起こり、この騒動が幕府だけでなく全国各藩を巻き込んだ。西は江戸に派遣させられることとなり、オランダ語や数学を学び、また日本人として初めてアメリカに渡ったジョン万次郎の英学塾に通うなどして、語学力を高め、29歳のときに幕府直轄の洋学研究機関である蕃所調所に採用されることになる。そして、31歳のときに、念願であった洋学の教授職を手にした西は、次なる目標として西洋の事情や学問の様子を直接学び、見識を広めるために外国へ留学することを希望していた。それから3年後、この留学の希望は果たされ、オランダへ発注していた軍艦「開陽丸」の受け取り要員として同行できることとなる。西は、留学先のオランダで、ライデン大学のシモン・フィセリング教授について、自然法や経済学、統計学などの講義を受けるとともに、後に西が依拠することになるJ.S.ミルやベンサム功利主義、コントの実証主義の思想を学んだ。帰国後、開成所と改称された洋学研究機関の教授として復職し、またその翌年には、京都で私塾を開き、五百人にも及ぶ青年志士に西洋の学問や外国語の講義を行なった。江戸幕府が崩壊した後も、西は旧徳川将軍家によって設立された「沼津兵学校」の校長や自宅に「育英舎」と名付けた私塾を開くなど、西洋思想を民間に広めようとたびたび教育に携わっている。因みに、「philosophy」を「哲学」という語を用いて訳したのも、こういった塾での講義の中で論じられたものであり、その後一般的にも使用されることとなったのはよく知られている。西はこうして、政府役人としての職務の傍ら、教育に携わってきたが、どれも公務との板挟みによって短期的なものに終わってしまっていた。そのような西であったが、1873年（明治6年）、再度国民への啓蒙活動を行なう機会が巡

ってくる。森有礼の呼びかけによって結社した「明六社」への参加である。「明六社」とは、明治6年に、森有礼・西周・福澤諭吉・津田真道・加藤弘之\*といった洋学者が中心となって、啓蒙活動を目的として結成した日本で最初の近代的啓蒙学術団体であり、2年間という短い期間にもかかわらず、明六社が世間に与えた影響は大きかった。

\*森有礼は薩摩藩出身の政治家であり、後の初代文部大臣でもある。津田真道は津山藩（現岡山県）出身で幕府の蕃所調所で働き、明治政府樹立後は司法省に出仕した。加藤弘之は出石藩（現兵庫県）出身で幕府の蕃所調所で働き、明治政府樹立後は外務大丞を歴任した。また東京大学の初代総長でもある。

西は、1875年（明治8）に『人生三宝説』を著し、西洋思想を東洋思想と絡めて、人生や社会、そして道德規範について論じ、自らがこれまで洋学者として学んできたことを国民に伝えようとした。この西による『人生三宝説』こそ、彼にとっての功利主義思想の解釈が明確に表れたものであった。では、その内容とは一体どのようなものだったのだろうか。

この『人生三宝説』は、明六雑誌の第三十八号から廃刊直前の第四十二号まで掲載された論文で、断片的な小論としてではなく、これまでの西の哲学論をまとめた連載物として発表されたものである。そこには、西洋思想をどのようにして既存の知識である東洋思想と結びつけて導入すべきかが表され、その上で西なりの思想が展開されている。そして、西洋思想の中心としては、特にJ.S.ミルの功利主義思想を取り上げている。西は、著書『人生三宝説』の冒頭で、J.S.ミルの功利主義思想について、「ベンサムの利学の道德論をジョン・スチワルト・ミル氏の拡張せられたるは、近時道德上の一大変革なり」<sup>3)</sup>と述べ、倫理学における大変革だと評価し傾倒していた。そして西は、ミルの功利主義思想にこそ、人々を啓蒙する力があるとして、これまでの外から押し付けられた古い慣習や価値観から脱却し、人々の最大福祉の実現を人生の目的とするべきだと主張し、ミルの著作を留学時に学んだときにミルの『Utilitarianism』に書かれていた“the great happiness”を「最大福祉」と訳した。なお、西以降における『Utilitarianism』の翻訳では“the great happiness”は「最大幸福」と訳されている。<sup>4)</sup>

\*陸奥宗光もベンサムの著書の翻訳において“great happiness”を「幸福」と訳している。

他の翻訳者が「幸福」と訳したのを、わざわざ「福

祉」と呼んだことには、その「祉」の意味を重視したためであると思われる。『大漢語林』によると「祉」には、「しあわせ。神から授かる幸福」<sup>5)</sup>といった意味があるという。また、西は幸福を「康福」と書く場合もあるが、この「康福」も「福祉」同様の意味として理解することができる。因みに、「康」には、「①やすらか、②丈夫、③やわらぐ、④たのしい、⑤しずか、⑥大きい、⑦大路、⑧むなし、⑨かめ、また、われがめ」<sup>6)</sup>といった意味がある。西は、「幸福」という概念を、天からの授かりものとしての「幸福」と、個人の経験に依拠した「幸福」とに区分している。『人生三宝説』においても、最大幸福の意味で、最大福祉の実現と述べているが、これは社会的な存在としての人間の幸福を「福祉」と呼んで貴び、個人的な幸福を「康福」と使い分けていることからわかるように、利己的な意味での「幸福」の追求にならないように、西が意識して使用していたことが推測される。ミル自身も精神的な快楽を重視して、利己的な「幸福」の追求に陥らないようにと主張していた。その上で西は、「幸福」の追求という明確な目標を立てながらも、どのようにしたら利己的な欲望に陥らずに、ミルの言う質的功利主義を実践することができるかを自分なりに考えていた。そして、その「幸福」を最大限に実現する方法としての提案が『人生三宝説』であったのである。

西は、人生の最大の目的が「最大福祉」であるとし、これを「人間第一最大の眼目」だと掲げ、それを実現する「第二の眼目」として「健康（マメ）・知識（チエ）・富有（トミ）」という三宝を挙げた。この三宝を「欲し、希い、求むる」ことが最大福祉を達成する手立てとなると、西は主張した。つまり、この三宝を基準に持って「幸福」を求めることが質的功利主義の実現につながると考えたのである。ミルは、快楽の質の高さを比べるときに、快楽を肉体的快楽と精神的快楽に二分し、両方の快楽をよく知る高尚な人物（例えばソクラテスといった人物）を想定し、その人が選ぶであろう快楽がより高次のものであるとした。西も、またミル同様に孔子や孟子の教えを例に挙げて、過去の聖人たちが結局はこの三宝を根本に据えて物事を考えていたとして、その正しさを説こうとした。

そして、この三宝を、個人道徳の規準として重視したことが、「人の身を修め、家を齊え、国家天下

を治むる」<sup>7)</sup>という西の主張からもうかがえる。だが、この個人道徳を社会道徳として直接に結び付けることは、朱子学が主張した個人道徳と社会道徳の在り方と同様で、あまりに短絡的なようにも思える。これについて西は、三宝を社会道徳の基礎とするための注意書きを記すことによって、その指摘に答えようとしている。

「道徳学においては、また、かの三大宝を貴重してこれを同人とともにするにあり。今その梗概を挙げてこれを示さん。その第一例規に曰く、いやしくも他人の健康を害することなかれ。しかして助けてもって進達すべくば、これを進達せよ。その第二例規に曰く、いやしくも他人の知識を害するなかれ（知識を害するとは人を欺き、もしくは人言を箝し、もしくは讒を講じ、誣をなす等みなこの中にあり）。しかして助けてもって進達すべくば、これを進達せよ。その第三例規に曰く、いやしくも他人の富有を害することなかれ。しかして、助けてもって進達すべくば、これを進達せよ。この三大例規を奉じて、わが同人に交わる、まことにその盛をきわめ、いわゆる仁のいたり義の尽くるなり。」<sup>8)</sup>

西は、他人の三宝を害するべからずという例規を定めて、これを「消極の三綱」と呼び、この例規を何よりも優先させ、その例規が守られた後に、己の三宝を満たそうとする「積極の三綱」を行なうべきとした。「消極の三綱」は、現代で言うところの消極的功利原理を意味しており、万人の苦痛や害悪を最小限に抑えることを目的とし、また「積極の三綱」は積極的功利原理を意味しており、万人の快楽や幸福を最大限にすることを目的にしている。これは、常にベンサムの唱えた功利主義において問題となっていた、全体の幸福を増進するためには、少数者の幸福を犠牲にしてもよいのかという批判に答えるものでもあった。まずは、他人の利益を損なわないように配慮し、その上で自己の利益を考えるという、いわば利他的な視点に立った快楽計算を行なおうとしたのである。そして、この他者を優先しようとする心持ちは「すなわち人を愛する」如くだとし、これこそ「人世至大至高、至美至善の徳」だとした。<sup>9)</sup>

また西は、「消極の三綱」こそ法律の源であり、「積極の三綱」は道徳の基礎であると考えた。この「消極の三綱」を法律の源と考えたことには、そこ

に含まれる二つの性質から導き出せるという。一つは自分の健康、知識、富有を害する「疾病・愚痴・貧乏の三禍鬼」を消極的に防ぐという性質であり、もう一つは他人の三宝を大切に、これに害を与えようとする己の「兇賊・詐偽・兇盗」という「三悪魔」を制御するという性質だとした。西は、前者の性質を「権利」と呼び、後者を「義務」と呼び、この「権利と義務」が満たされたときにこそ、社会の幸福を最大にするための基礎を出来上がると主張した。そして、この「権利と義務」を守るためにこそ、政府は法整備といった働きをしなければならないとした。

西のこの利他的な快楽を中心に考えた功利主義思想は、陸奥の捉えた功利主義思想とは異なり、国を経済的に発展させるための効率的な思考方法としてではなく、あくまで国民の啓蒙を目的として道徳規範を主張したものであった。例えば、現代であれば、個人個人がそれぞれの目標や欲求に向かって学業に励んだり、職業を選択したりすることが可能であるが、この時代においては、藩主の命や家柄によって人生が決まってしまうということが普通であった。西に言わせれば、そういった上からの押し付けによる人生選択こそが個々の三宝を損ない、「権利と義務」といった意識の育成を阻害し、自立した個人の在り方から遠ざけてしまうものであった。それぞれが他者の「権利」を尊重しながら、自己の幸福を実現しようとする意識を育て、そのための環境を政府が保護していくということが、近代化の流れに飲み込まれないで、福澤の言うところの「一身独立」するための手立てとなると西は考えたのである。

『人生三宝説』の出版から2年後、西はJ.S.ミルの『Utilitarianism』を『利学』として正式に翻訳、出版し、自己の論文の根拠となった著作を世間に発表している。そして、明六社が解散されてからも、東京学士会院において会長として活動したり、また東京師範学校（現筑波大学）や獨逸学協会学校（私立の旧制学校）の校長にも任命されたりと現場に立って活動した。

以上、陸奥宗光と西周のそれぞれの功利主義思想の特徴について述べてきたが、その受け取り方は両者の間で決定的に異なっていたと言える。すなわち、陸奥においては、政治主導で近代国家を成立させるための功利主義思想であり、西においては学者による国民啓蒙のための功利主義思想であった。そして、

その功利主義思想の性質も陸奥が人間の「欲」を肯定し、「欲」によって経済活動を発展させようとした。これに対し、西のそれは、あくまで利他的な立場に立った幸福追求という道徳規範としての意味合いでの功利主義思想であった。どちらも、これまでの価値観からの脱却を図り、幸福を目指そうとした点は共通であったが、その幸福を目指した先が異なっていたために思想に違いが生まれたのであろう。それでは、こうした陸奥と西に代表される功利主義思想がどのような形で、近代日本の教育に影響を与えることとなったのだろうか。

## 2. 「立身出世」という功利主義思想の導入

江戸から明治への時代の移行は、社会体制だけでなく学問においても変化をもたらした。明治に入り西洋思想が取り入れられるようになると、それ以前の朱子学の学びが空理虚談に陥る傾向にあったものとして否定され、本来学ぶべきものは実用的な学問や芸術であるべきだと強調されるようになった。また、これまでの伝統的な身分階級制度に代わる人材登用を行なうために、エリート育成を目的とした教育が進められ始める。富国強兵の実現を目指した政府が主張した、このエリート教育の在り方は、後の学歴による、雇用と社会的地位の決定という価値観の基礎を作ることとなる。こうした実利的な教育への転換の背景には、前時代の教育的善さが「天」や「善」といった超越的・客観的性格を持って教えられていたことに対して、明治における教育的善さが個人的な「幸福」や「快苦」の追求という功利主義的な発想へと変化したと言えるだろう。つまり、人々の目指すべき在り方が「聖人・君子」的な高尚さから、個人の欲求の充足へと変化したのである。

それまで、江戸時代においては、個人の欲とは抑えられるべきものであり、儉約や忍耐といった価値観が美德とされ、分をわきまえた生き方が「善い」とされてきた。そのため、「身を修める」ための学びが「善い」とされ、決して「立身出世」というような、高い地位や名声を得ることを直接の目的にはしていなかったのである。それが、明治維新を経て、陸奥に代表されるような「欲」の肯定とその充足が、結果として経済活動を活発化し、富国の目標が達成できるとする功利主義思想に支えられた価値観によって変化が訪れたのである。

政府による、こうした新たな価値観による教育の

考え方は、子どもの意識にも影響を与え、教育がこの「立身出世」といった実利や功績を得るための手段としての認識を強めることとなる。ここにおいて、教育の目的が自己の修養それ自体にあるのではなく、そこからもたらされる実利を得るためという性格が形成されることとなる。また、教師側においても、より実利が増すような教育の在り方や国家のための人材育成といったことが目的となり、個々の人格を高めるといふ、それまでの教育観から離れるようになった。

因みに、政府が、個人の修養を直接の目的としたわけではなく、あくまで国家のための人材育成と考えていたことは、初代文部大臣であった森有礼が、教育勅語発布の前年に、直轄学校長に対して教育政策について説示した『文部省において直轄学校長に對する演説』の中に明確に表れている。

「抑政府カ文部省ヲ設立シテ學制ノ責ニ任セシメ、加之國庫ノ資力ヲ籍リテ諸學校ヲ維持スルモノ畢竟國家ノ爲メナリトセハ、學政ノ目的モ亦専ラ國家ノ爲メト云フコトニ歸セサル可ラス、例セハ帝國大學ニ於テ教務ヲ舉クル學術ノ爲メト國家ノ爲メトニ關スルコトアラハ、國家ノ爲メノコトヲ最モ先ニシ最モ重セサル可ラサルカ如シ、夫レ然リ、諸學校ヲ通シ學政ニ於テハ生徒其人ノ爲メニスルニ非スシテ、國家ノ爲目ニスルコトヲ始終記憶セサル可ラス」<sup>10)</sup>

結局、森の教育に対する考え方は、国家繁栄のためになすものであるとするものであった。そして、政府は同時に、国家繁栄を目指した教育を加速させるために、「立身出世」という御旗を掲げて、国民にとって教育とは実利をもたらすものだと刷り込み、進んで（勉強）に向かわせようとしていったのである。

政府の掲げた「立身出世」という功利主義的思想は、文部省が設立され近代教育制度という政府主導の教育改革が行なわれるとともに、その姿を現すこととなる。

例えば、政府が、「立身出世」のための「学問」という価値観の定着のために、唱歌を利用したのもその一つである。これに関して、職業能力開発総合大学校の名誉教授である田中萬年は著書『明治教育の呪縛』の中で、その点について次のように言及している。

「政府は歌も利用した。それは、明治天皇の侍講

であり、明治期の教育政策に絶大な影響を及ぼした元田永孚の『教学聖旨』における「幼少ノ始ニ其脳髓ニ感覺セシメテ培養スル」とした方針によるものであった。政府推奨の歌は 1881 年（明治 14）の『小学校唱歌集 初編』から、1935 年（昭和 10）の「新撰尋常小学校唱歌」までおびただしく刊行された唱歌集に掲載されていた。明治 14 年の初編に載った「ほたるの光」は今日まで国民に親しまれている。（中略）その一番では「書よむつき日、かさねつつ」と勉学を説き、三番では「ひとつにつくせ、くのために。」と国家主義を歌ったものであった。1984 年（明治 17）に三番目に出版された『小学校唱歌集（三）』には『あおげば尊し』がある。（中略）その二番では「身をたて 名をあげ、やよ はげめよ」と立身出世を説いたものであった。」<sup>11)</sup>

このようにして、明治政府は学問が「立身出世」のための機会であることを唱歌を媒介にして浸透させようとしていたのである。そして、この風潮によって、立身出世を焚きつける書物も、好んで読まれるようになってきた。特に、イギリスの作家であるスマイルズが著し・中村正直が訳した『西国立志編』（1871 年、明治 3 年）は人気を博した。『西国立志編』とは、欧米の偉人伝を集めたもので、努力奮闘しさえすれば、誰にでも「立身出世」の可能性があることを説いており、これは大正時代まで読み継がれ、その部数は百万部を超えたという。こうした書籍による大衆に与えた影響は大きく、明治 10 年創刊の少年の投稿作文集である『穎才新誌（えいざいしんし）』には、彼らの著作に呼応した多数の「立身出世」ものの作文が寄せられたという。『穎才新誌』とは、小学校生徒・小学校教員・中学校生徒など青少年の作文を主にした投書雑誌のひとつで、その発行部数は明治 12 年において毎週 1 万部を超えるほどの人気であった。その中では、文明開化に伴って、新たな人材登用の道が開けたとして「立身出世」を夢み、それを学問によって成し遂げようといった内容の作文が数多く投稿されたという。

こうした政府の執った「立身出世」による教育観は、大正時代の教科書にも見ることができる。京都大学教育学部教授である竹内洋は『尋常小学修身書卷二児童用（第三期）』を例に出して説明を行なっている。

「五 ベンキヤウセ ヨ ココ ニ 二人 ノ ラ  
トコ ガ キマス。二人 ハ モト オナジ ガ  
クカウ ニ キマシタ。一人 ハ センセイ ノ  
イマシメ ヲ マモラズ、ナマケテ バカリ キ  
タ ノデ、コンナ アハレナ 人 ト ナリマシ  
タ。一人 ハ ヨク センセイ ノ ヲシヘ ヲ  
キイテ、ベンキヤウ シタ ノデ、イマ ハ リ  
ツバナ 人 ト ナリマシタ。」<sup>12)</sup>

ここでは、勉強することによって、立派な人間となれる一方で、勉強しない者は没落を免れないことが説かれている。また、この文章には挿絵が載っており、文章に登場している二人の男の姿が描かれている。片方は整った服装でステッキを持っており、もう一人は草むらに座り、髪や髭が伸び放題で敗れた服を身に着けているという、いかにも金持ちと貧乏の対比とみられるような挿絵である。しっかりと勉強しなければ、挿絵の男のように落ちぶれるだろうという戒めのような内容であるが、こういった価値観の植えつけは現代を振り返って考えてみると見事に成功しているように感じる。

### 3 功利主義思想が教育にもたらした弊害とそれに対する批判

明治 30 年以降、受験競争がしだいに本格化してきた頃には、政府や民間雑誌による学問の奨励と企業による「学歴」の重視といった風潮によって、個人利益の充足を求める「立身出世」の価値観は見事に国民の間に根付くことになる。誰もが、これまでよりも物質的な「快い」暮らしを求めて、学問に向かっていったのである。だが、この教育に対する風潮は、後に「学歴」を手にすることが教育の目的だとする価値観をも生み出すこととなってしまい、子どもにとっては受験のための「学問」でしかなくなってしまった。こうした教育の手段化に対して、批判も当然のことながら起こった。

#### (1) 永井荷風による近代学校批判

受験のための「学問」といった風潮や、そういった風潮に対する批判は、当時の小説家の作品によってもうかがい知ることができる。例えば、永井荷風(1879-1959)が明治 42 年に発表した『すみだ川』では、主人公の下町の少年(長吉)が、母に言われるがまま中学校へ進み、ゆくゆくは大学も行くようにと指示される。母がどれだけ息子を大学へ進学さ

せたいと考えていたかは、「零落した女親がこの世の楽しみと云ふのは全く此の一人息子長吉の出世を見やうと云ふ事ばかりで、商人はいつ失敗するか分らないと云ふ経験から、お豊は三度の飯を二度にしても、行く行くはわが児を大學校に入れて立派な月給取りにせねばならぬと思って居る。」<sup>13)</sup>ほどであった。学業のための学費や生活費が掛かるうとも、その分の見返りがあると考えていたのである。だが、この母による子どもへの学歴による「立身出世」という希望に反して、主人公は、自分の本当にやりたいことは、学校では学べないとした。「學問なんぞしたってつまるものか。學校は己れの望むやうな幸福を與へる處ではない。」<sup>14)</sup>と主張し、学び本来の目的である自己の関心とは全く関係なく、学校では学問が行なわれていると嘆いている。最終的に主人公の青年は、学校での学びがつまらないものにしか感じられず、ついには落第してしまう。ここには、永井荷風自身も、自己の意志ではなく、父の命令によって高等学校を受験させられたということと、永井は病気によってではあるが、一時中学校を休学したことによって、勉強から離れて文学の世界に引き込まれていったという経験が関係しているだろう。

永井の『すみだ川』は、実際に学校で行なわれている教育が画一的で個性を殺し、芸術といった感性とは無縁の場所であったと非難し、また学歴による「立身出世」を妄信している親の意識というものを投影させて、それを批判した作品であるとも言えるだろう。

#### (2) 新渡戸稲造による近代学校批判

新渡戸稲造(1862-1933)は、明治 37 年に出版された『我が教育の欠陥』において、明治の教育のもたらした弊害について、次のように述べている。

「吾人をして器械たらしめ、吾人よりして厳正なる品性、正義を愛するの念を奪いぬ。一言にしていわば、これぞ我祖先が以て教育の最高目的となしたる、品格ちょうものを、吾人より奪い去りたるものなる。智識の勝利、論理の軽業、あやつり、哲学の煩瑣纖微、科学の無限なる穿究、これらは吾人を変えて、思考する器械たらしむるに過ぎざるものなりとせば、畢竟何の益かある。」<sup>15)</sup>

新渡戸は、「思考する器械」という言葉に象徴さ

れるように、画一的に与えられる知識による人格を歪める弊害を痛烈に批判している。知識を生かすものは、人の精神であり、精神がぞんざいになってしまえば、知識は無用の長物になってしまう。そして、そうした知識ばかり重視するといった意識で学問を行なっている限り、子どもにとって学問は、「よほどのうさい、頗る苦しいもの」となってしまい、結果として成績に一喜一憂するばかりの「小才子」の天下になると危惧している。

また新渡戸は、著書『教育の目的』の中で、現在の教育が地位を得るための手段に陥ってしまい、本来の教育の目的から外れてしまっていることを批判している。新渡戸にとって本来の教育の目的とは、「職業・道楽・装飾・真理研究・人格修養」の五つだという。「道楽・装飾」というと、金にまかせて気ままな遊びに耽ったり、ファッションとして知識を身につけたりすることのように現代から見れば考えてしまうが、決してそういった意味ではない。新渡戸は、「教育を面白いものである」と子どもたち自身が考えて、そのために学問するような、苦しいものとしてではなく「道楽」であるべきだとした。また「装飾」についても、現代的に言えば、社会生活を送る上での幅広い教養や基本的な礼儀作法を意味しており、まさに生きる力をつけるための学問であるべきだとしている。新渡戸は、明治期の教育がそういった目的をどれも十分に達成できていないとし、その背景には、教育家たちが子どもたちを「ただ唯々諾々として己れを造った人間に弄ばれ、その人の娯楽のために動くような人間」や「ただ理窟ばかりを知った、利己主義の我利我利亡者で、親爺の手にも、先生の手にも合わぬようなものを造り、かえって自分がその者より恨まれる如き人間を養成する」ような教育を施しているからではないかと指摘している。それでも、「職業」についての教育だけは成功しているのではと思われるかもしれないが、明治の日本の職業教育はあくまで「社会的地位」を得ることを主眼とされており、学生たちの具体的な職業あるいは職種への関心は薄く、将来展望がきちんと成されていない状態であり、決して成功しているわけではないと、新渡戸は述べている。<sup>16)</sup>

以上、ここでは永井荷風と新渡戸稲造を取り上げたが、特に明治後期には彼らと同様の批判が数多く噴出してきていたことも事実である。こうした功利主義的価値観に基づく教育への不信感や批判は、明

治政府の推し進めてきた教育が「立身出世」のための手段となってしまったために、画一的で、個々の関心や人格を高めるといったことからかけ離れたものとして行なわれることになった。結果的に、明治政府が教育の近代化を実現するために打ち出した、学歴や職を獲得するための教育というシナリオは、天皇制国家主義体制という国の大枠は変わることのない中で、大正デモクラシーと呼ばれる時代に入る頃には、個人主義、教養主義に基づく一層の功利主義的価値観が全国的に広がりを見せるようになり、受験を希望し、高学歴を得ようとする子どもの数をますます増大させていくことになるのである。

#### 注

- 1) 陸奥廣吉『伯爵陸奥宗光遺稿』岩波書店、1929年、pp.15-16。
- 2) 同上書、p.181。
- 3) 植手通有編『日本の名著 34 西周加藤弘之』中央公論社、1971年、p.229。
- 4) ベンサム著陸奥宗光訳『利学正宗上巻』国立国会図書館近代デジタルライブラリー、2010年、<http://kindai.da.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/753034> Jeremy Bentham『An Introduction to the Principles of Morals and Legislation』Basil Blackwell Oxford、1948年、p.125。
- 5) 鎌田正・米山寅太郎『大漢語林』大修館書店、1992年、p.1019。
- 6) 同上書、p.469。
- 7) 植手通有編『日本の名著 34 西周加藤弘之』中央公論社、1971年、p.231。
- 8) 同上書、p.234。
- 9) 同上書、p.236。
- 10) 大久保利謙編『近代日本教育資料叢書森有禮全集第一巻』宣文堂書店、1972年、p.663。
- 11) 田中萬年『明治教育の呪縛—誤解させられてきたいきさつ—』燭台舎、2011年、pp.58-59。
- 12) 竹内洋『立身出世主義近代日本のロマンと欲望』日本放送出版協会、1997年、p.26。
- 13) 永井壯吉『荷風小説三』岩波書店、1986年、p.9。
- 14) 同上書、p.21。
- 15) 鈴木範久編『新渡戸稲造論集』岩波書店、2007年、p.14。
- 16) 同上書、p.54。